

永 文 平 和

石原莞爾自筆

第136号
(平成28年4月25日)

目次

巻頭言	1
評伝が語る石原莞爾と父・和田勲	1
★組織論からみた東亜連盟	2
和田獅郎	
野村乙二朗	
◆【連載】	
蜃気楼の国・満洲国(その4)	4
坂本進一	
●石原莞爾の「戦後」を歩く⑥	6
●昭和天皇の御製① 岩崎章次	7
●会員便り	8
●総会案内	9
●『最終戦争論』を読んで	10
橋場康之	
●自ら知る努力	11
●SNS	12
●編集後記	11

宣言(昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

評伝が語る石原莞爾と父・和田勲

本会顧問 和田獅郎



昭和55年に刊行された「和田勲將軍とその回想録」で刊行委員会の事務局長をされた鈴木利方様(注)の「石原將軍と和田先生」と題する一文を紹介します。

「將軍の先生(編集部注・和田勲)に対する信頼は絶対であつて、運動の資金は原則として、会費によつてまかなうことを、いつもきびしくいわれ、会員を指導しておられた將軍も、和田が持つてくる資金は、間違いなく大丈夫だから、使つても良いと認められていた由である。

將軍が講演で、全国各地を巡廻されるときは、必ず同行され、旅館も同室で、將軍は奥の部屋にやすまれ、夜半、將軍が便所に行かれるときには、必ずついて行かれ、廊下で待つておられたという。

將軍が亡くなられて一年目に、先生の呼びかけで、会津若松の清水屋旅館で、追悼会を兼ねて、將軍を偲ぶ座談会を開催されたとき、私も出席させて頂き、非常に感激したことをいまもつて思い出しますが、そのとき、先輩各位の立派ななつかしい思い出話のあと、先生が発言され、『皆さんは石原さんの立派なきれいなことを申されたが、私は石原さんのきれいでない別な一面を披露します』といつて次のように話された。

石原さんは、便所で用を足しても、手を洗わない人であつた。われわれは便所から出たら、必ず手を洗うのに、なぜ手を洗われないのか。或るとき聞いてみたら、『いや、別に手を汚さないから洗う必要がない。もし、手が汚れたら

洗うよ』と言われた。石原さんという人は、そういう『汚い』面もあった人です。

この話こそ、夜半に便所の往復までついて將軍を護られたことの実証でありましょう。

精華会が発行した『石原莞爾研究一集』に、『眞の愛情の人』と題して、先生が口述された一文が載つてゐる。そのなかに、『私は石原さんを、神様や仏様あつかひにして、無批判にあこがれるようなことはしたくない。ありのままの姿こそ、私の心のなかに強く生き、やきつけられてゐる。

石原さんは非凡な人であり、脱俗した人でありながら、庶民の世界の中に住むことに喜びを感じておられた。平凡人としての生活を最も楽しんで居られた。所謂、怠け者の生活貴族生活というものからは、遠く離れてゐたのみでなく、それらに対して非常に潔癖に対立されてゐた。畑の中に裸になつて猿股一つで、自分で作った野菜を手にかけておられる姿などが、最も石原さんらしい姿であると思う。農作物を心から楽しみながら作り、畑を愛してゐた人に、冷酷な人情味のない人間を発見することは出来ない。』といつておられる。

幼年学校時代から、兄と頼み、師と仰ぎ、心から尊敬され、日本のため、アジアのため、ひいては世界のために、この人を護らねばならぬいと、寝食を忘れて尽され、將軍の絶対的信賴を得られた先生にして、はじめて言い得た言葉でありましょう。

満州事変以来、『石原の陰に常に和田あり』といわれるに至つた因縁は、遠く和田先生の幼年学校時代からはじまつたものと、私は確信します。』

(注) 鈴木利方…東亜連盟会員。武田邦太郎の「新農政」にも共鳴。

和田獅郎 …… 昭和5年(1930年)7月、和田 勲(東亜聯盟同志会代表)の長男として大連に生まれる。昭和13年、当時、関東軍司令部参謀副長をされていた石原將軍の官邸に、一人自転車で訪問し、ご挨拶申し上げた。同昭和13年に帰国。昭和16年に東亜聯盟同志会に入会。

編◆集◆後◆記

▼黒澤明監督の名作「七人の侍」を貫くテーマは、「民人は弱い。限りなく弱い。だからこそ限りなく強い」だと思ふ。

この「弱い」と「強い」を「愚か」と「賢い」に置き換えた時、戦後の所謂55年体制以降において、マスコミや学者などの文化人らがどんなに自民党政権を批判しようとも、また共産主義国の「素晴らしさ」を如何に喧伝されようとも決して社会党や共産党に政権を委ねるといふ判断をしなかつた日本国民の総体としての聡明さを私は痛感せざるを得ない。

学者や活動家らと違い、理想や理論としてではなく、共産主義国の現実を直視して論理よりも己の感性を信じて評価したのである。だからこそ正しい判断ができたのだと思ふ。

翻って、福島第一原発事故以来の国民の総意は「原発ゼロ」である。そして「電力の安定供給」といった美辞麗句を政府や電力会社から述べられようとも、再稼働や本来40年で廃炉にすべきはずの原発を60年まで稼働させようとする背景に潜む「うさん臭さ」を直感している。

40年で廃炉にしない本当の理由は至って単純だ。電力会社にとってたとえ休止中であっても原発はプラスの資産として計上できる。しかし、一転して廃炉にしてしまうと、資産価値が一挙に零になるだけでなく、廃炉に要する何百億もの費用を計上しなければならない。しかも廃炉決定から完了にまで要する年月は20年ほどにもなる。そのため、廃炉決定後は赤字決算になる可能性があり、経産省などから天下りしている

役員らの報酬や退職金に「悪影響」を及ぼす。廃炉延長はそれを先延ばしするための手段と言えなくもない。

私は長年核兵器や原発問題に取り組んできたからある程度のことは判る。そしてそれらの知見を元に「原発村」発信の欺瞞性を指摘できるのだが、「原発ゼロ」を望む国民の多くはそのことを個別具体的には知らないはずだ。だけれども「原発ゼロ」という正しい判断をしている。ゆえに私は己の知見をそのような国民のために使いたいと思ふ。(山崎)

▼稼働させれば次々に事故が起きた。発電所内で発電機にトラブルを起こしても隠している、マスコミを前に万全の状態でもアラームがなるわけだ。このようなことは日常茶飯事なのでしよう。原因がすぐ分からないのだから深刻です。先日の冷却材放射能漏れという規制基準適合性審査を通った原発が次から次へとトラブル続きとは恐ろしいといひ言いがたい。冷却材喪失事故の原因もはっきりしないまま再起動していた高浜原発4号機で、原子炉出力10%で発電と送電を行う並列という作業を行おうとした瞬間、原子炉がスクラム(緊急停止)した。この原因は分かっているという。4年7ヶ月の間、関西電力は一体何をしていたのであろうか。何が何でも動かせと政府からも圧力がかかり続けているのが原因なのであろうか。福島第一原発2号機では、実際に外部電源喪失から非常用ディーゼル発電機起動失敗事故を起こしている。原子炉はスクラムしたものの炉心水位が急降下し、ECCSの作動寸前にまでいった。

た。規制委が目をつぶろうと無視をしようと現実には、高尚な事故対策以前に、達成されていくべき電源設備や配管の健全性からして、崩壊しているのが今の原子力発電所だ。老朽化していて隅から隅まで歪みだらけになっている。悪い設備に金をかけて修理して健全性を維持すれば、その分儲けが減る。古い原発はできるだけ費用をかけないで稼働させなければ元が取れない。しかも新規規制基準に適合するため、既に1000億円もかけてしまった。そんな事業者の懐具合に親切丁寧なのが規制庁だ。40年の老朽炉1号機にしても日程に間に合わせて動かし続けさせようとしているではないか。規制委が何かを見つけて危険を未然に回避できるどころか、むしろ見て見ぬ振りで再稼働を推進しているのだ。これではどんな事故が起きても不思議ではない。再び原発事故を引き起こせば、国が減じるのではないだろうか。(仲條拓躬)

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒179-0076 東京都練馬区土支田3-46-7

山崎行政書士事務所内

TEL(FAX兼用) 03-3925-2353(山崎)

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人「永久平和」編集委員会

定価 200円(送料別)

会費(年間) 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第136号 平成28年(2016年)4月25日発行